

2025年 8月 浜松聖書集会のご案内

(時間：午前10時～正午)

- 8月 3日 (日) 集会 (クリエート浜松 22号室)
司会：永井 徹
聖書講話：テサロニケの信徒への手紙 一 1章4～10節
「主に従いゆくもの (その2)」 水戸 潔
- 8月10日 (日) 集会 (クリエート浜松 22号室)
司会：武井 めぐみ
聖書講話：ローマの信徒への手紙 10～12章
「神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい」 溝口 春江
- 8月24日 (日) 集会 (クリエート浜松 文芸館)
司会：大手 美千代
聖書講話：創世記18章20～33節 マタイによる福音書5章14～16節
「心に残った物語」 永井 徹
- 8月31日 (日) 集会 (クリエート浜松 22号室)
司会：生江 扶左子
聖書講話：ヨハネの黙示録 22章
「主よ 来りませ (マラナ・タ)」 武井 陽一

黙示録をどう読むか

ヨハネ黙示録に学ぶ (第37回)

… (ヨハネ) 黙示録をどう読むかという根本問題に立ち帰る必要がある。黙示録は歴史的事実を記録した史実ではなく、著者ヨハネが信仰による霊の世界で、神から見た示された幻を文学的に記述した黙示文学である。しかも本書の執筆された時代的背景は、ローマ皇帝を神とする礼拝が強要され、これに従わないキリストの信徒の上に、激しい迫害と殉教死が押し迫っている暗黒時代であった。しかも著者の時代 (AD90年代) の『世界』とは、ローマ帝国のことであって、地球全域に広がる広大な世界があると知る由もない時代であった。それゆえ、著者はローマ帝国の滅亡をもって最後の裁き考え、一日も早い終りの日の到来 (主の再臨) を待望したのも無理からぬことであった。当時の信徒たちが「主よ来たりませ (マラナタ)」と待ちこがれたのも、このような意味合いを含んだ終わりの日であったと思われる。

ヨハネの黙示録は、このような地理的、歴史的な認識において時代的制約を受けているが、その中で著者ヨハネは、神との深い霊交の中で、その制約を超えた神の純粋な真理 (主の再臨、最後の審判、神の国の到来) の啓示を受け止め、これを当時の信徒に伝え、不屈の希望を示しつつ、最後まで主への忠実と忍耐を堅持するようにと励ますために本書は書かれたのである。

しかし同時に、神とキリストに敵対するローマ皇帝をはじめ、汚れと偽りに満ちた、不信仰の輩 (やから) に対しては、一刻も早く呵責なき神の怒りが下り、呪いにも似た思いで、火の池に投げ込まれることを期待し、だれ一人聖なる都にいれないという徹底した裁きへの待望が、幻の中に投影されていることも事実であって、黙示録にはこれらが複雑に組合わされ、時には絡み合っていることを弁 (わきま) えて読むことが重要であると考えられる。

その中から我々は、変わることなき神の真理を読み取っていかなければならない。それを可能にするのは、イエス・キリストの福音以外にはないであろう。